

原 著

青年期ダウン症者の自己制御機能と自己効力感の関係

小 島 道 生*・池 田 由 紀 江**

本研究の目的は、青年期ダウン症者の自己制御機能と自己効力感の関係について検討することである。青年期ダウン症者 31 名を対象として、自己制御機能と自己効力感を測定し、自己制御機能と自己効力感の得点差を分析し、Pearson の積率相関係数を求めた。その結果、自己主張面の「能動性・主体性」及び「拒否・強い自己主張」では自己制御機能と自己効力感の有意差は認められず、自己効力感が自己制御機能の予測値として機能する可能性が示唆された。よって、自己決定や課題への自主的な取り組みが求められる場面では、青年期ダウン症者の自己効力感を高めるような指導が重要であることが示唆された。自己抑制面では、「待機行動」と「規則への従順」に中程度の相関が認められ、自己制御機能と自己効力感の有意差は「規則への従順」で認められたが、「待機行動」ではなかった。この他の下位次元である「他者との協調性」や「感情抑制」と自己効力感の相関はなく、多様な要因や結果を考慮する必要のある社会的行動にまで自己効力理論を展開するには限界があることが示唆された。

キー・ワード：青年期ダウン症者 自己制御機能 自己効力感

I. はじめに

ダウン症者の社会性の発達は、自閉症者と比較すると発達が良好であることが指摘 (Loveland & Kelly, 1988¹³⁾) され、一般に良好な印象がある。しかし、青年期ダウン症者の適応行動の特徴として、引きこもりや頑固であることが高い割合で認められると指摘されている (Gibbs & Thorpe, 1983⁵⁾; 細川・池田・橋本・菅野, 1992⁶⁾)。また、近年では日常生活の能力が急激に低下する「退行」といわれる症例も報告 (横田, 1996²⁶⁾) され、ダウン症者は青年期において特有な社会的問題行動が生じているといえよう。

このようなダウン症者が示す社会的問題行動に対して、行動統制に関わる自己制御機能 (self-

regulation) が重要な心理的機能となることが指摘 (Pueschel, 1996¹⁸⁾; Cuskelly & Gunn, 1997⁴⁾) されている。自己制御機能 (Self-Regulation) とは、自分の意志・意図に基づき自ら行動を統制する働きと定義され、その構成は自己主張面と自己抑制面からなる (Thorensen & Mahoney, 1974²³⁾; 柏木, 1988⁹⁾; 山崎・白石, 1993²⁵⁾)。ダウン症者の発達レベルを考慮した場合、自己制御機能は特に青年期において重要な心理的要因になると述べられ (Cuskelly & Gunn, 1997⁴⁾)、自己制御機能を発達させることが教育的課題とも指摘 (Jobling & Cuskelly, 2000⁸⁾) されている。さらに、自己制御機能は青年期ダウン症者の自己決定や効果的なストラテジーを使用すること等、自己の能力 (self-competence) に関わる本質的な要因の一つとも主張されている (Powers & Sikora, 1997¹⁷⁾)。

近年では、青年期ダウン症者を対象とした自

*筑波大学心身障害学研究科

**筑波大学心身障害学系

己制御機能に関する実証的な研究も報告（小島・池田，2000 a¹⁰⁾；b¹¹⁾；c¹²⁾；Jobling & Cuskelly, 2000⁹⁾）されてきている。小島・池田（2000 a¹⁰⁾）は、青年期ダウン症者の社会的場面における自己制御機能の特徴を分析した。その結果、自己主張面では抗議や拒否の意志等の明確で強い自己主張に関しては優れているものの、主体性が求められる場面での意志表示や、積極的に物事に取り組むことに関しては困難であることが示唆された。一方、自己抑制面の特徴としては、学校生活等での規則を守ることに優れているものの、自分の要求が受け入れられない場面での感情抑制に関しては困難であることが示唆された。Jobling and Cuskelly (2000⁹⁾) は、青年期ダウン症者を対象とした健康的な生活を行うための自己制御機能を高める教育的プログラムを開発し、試行している。そして、今後は衛生、食事、運動の側面に関して、青年期ダウン症者の自己制御機能を高めるような教育的プログラムを検討していく必要があると主張している。

このような青年期ダウン症者の自己制御機能に関わる要因としては、これまでに他者感情推測能力（表情認知能力・状況認知能力）、社会的視点取得能力や性格特性に関して検討がなされてきた（小島・池田，2000 b¹¹⁾；c¹²⁾）。状況認知能力は自己制御機能の二領域である自己主張面及び自己抑制面の両面と相関があることや社会的視点取得能力は自己抑制面と相関があることが明らかにされてきた（小島・池田，2000 b¹¹⁾）。性格特性では、外向性と自己主張面が最も相関があり、統制性と自己抑制面が最も相関があることが示されている（小島・池田，2000 c¹²⁾）。

この他に、自己制御機能に関わる重要な要因として、自己効力感が指摘（Bandura, 1977¹⁾）；竹綱・鎌原・沢崎，1988²²⁾）されている。自己効力感とは、特定の状況下において必要な行動を効果的に遂行できるという信念であり、自己の行動に関する可能性の認知とされている。いわば、自己効力感は明示されている種々の遂行を達成する行動の道筋を組み立て、かつ実行でき

る可能性があるかどうかの個人の判断と換言される（Bandura, 1986²⁾）。この自己効力感の程度は、その後の遂行行動の最も重要な予測値とされ（Bandura, 1977¹⁾）、自己制御機能のシステムに含まれる重要な要因として捉えられている（Bandura, 1991³⁾）。これまでに健常児・者を対象とした臨床・教育的研究において、自己効力理論の妥当性が数多く証明されている（坂野・東條，1993¹⁹⁾）。また、健常児を対象とした自己効力感に関する実験研究（Wheeler & Ladd, 1982²⁴⁾）では、健常児の抱く自己効力感は、同様な測定尺度による評価と教師や仲間との間に有意な相関が認められ、行動の予測値として機能する可能性が示唆されている。これらの健常児・者の先行研究を踏まえると、青年期ダウン症者の自己制御機能と自己効力感の間には何らかの相関が認められると予想され、今後、自己制御機能の発達援助を検討していくうえでも重要な変数となる可能性が高いと予想される。

しかし、青年期ダウン症者を対象とした自己効力感に関する実証的な研究は報告されておらず、自己効力感が実際に特定場面における行動に対してどの程度の予想値として機能するかは明らかではない。多様な要因・結果を考慮する必要がある社会的行動にまで Bandura (1977¹⁾) の自己効力理論を適用する場合、限界が存在することも指摘（Maddux & Stanley, 1986¹⁴⁾）されており、場面によっては、自己効力感が行動の予測値として機能しない可能性もあると推測される。そこで、本研究では、青年期ダウン症者を対象として、自己制御機能と自己効力感の関係を検討することを目的とする。本研究では、まず自己制御機能と自己効力感の差を検討することで、どのような場面において自己制御機能と自己効力感の差が生じやすいかを分析する。次に、各下位次元別に自己制御機能と自己効力感との相関関係を検討することで、どのような場面において自己効力感が自己制御機能の予測値として機能するのか明らかにする。

II. 方法

Table 1 被験者の生活年齢、精神年齢、語彙年齢

	生活年齢	精神年齢	語彙年齢
平均	16.8歳	7.0歳	6.4歳
標準偏差	1.5	1.5	2.2
範囲	13.0~18.4	4.5~10.5	4.2~10.4

- ・精神年齢は、田中ビネー知能検査法により測定
- ・語彙年齢は、絵画語彙検査により測定

1. 被験者

被験者は、養護学校及び特殊学級に在籍するダウン症者 31 名であった。保護者及び担任の教員に予め本実験の説明を行い、評価可能であると判断された被験者に対して実施した。被験者の生活年齢、精神年齢、語彙年齢は、Table 1 の通りである。

2. 質問紙と評価項目

1) 自己制御機能の測定

自己制御機能の測定は、小島・池田(2000 a¹⁰)が作成した「知的障害者の自己に関する行動調査質問紙」を用いた。この質問紙は、先行研究(小島・池田, 2000 a¹⁰)において高い信頼性・妥当性が証明されている。質問紙は、学校の担任の教員が記入する他者評定であり、「ほとんどない」から「きわめておおい」までの 5 件法である。

質問紙は、全部で 51 項目からなる。自己主張面と自己抑制面の 2 領域に分かれ、自己主張面の下位次元として、「能動性・主体性」、「拒否・強い自己主張」、「友人への積極性」、自己抑制面の下位次元として、「待機行動」、「他者との協調性」、「感情抑制」、「規則への従順」が設定されている。具体的な質問項目は、Table 2 の通りである。

2) 自己効力感の測定

本研究における自己効力感とは、自己制御機能の定義及びその構成を踏まえると、特定の場面においてどのくらい自己主張あるいは自己抑制できるかという自己の可能性の認知といえる。つまり、自己効力感の質問項目は、自己主張あるいは自己抑制に関する行動の評価項目と

対応する必要がある。従って、まず項目設定の際には、「知的障害者の自己に関する行動調査質問紙」の各下位次元が反映されるように、因子負荷量の高い項目を考慮し、7 つの下位次元ごとに 4 項目ずつ、合計 28 項目を設定した。

次に、現職の養護学校教員 10 名に対して、ダウン症者に対する質問項目として適切か否かの二件法による内容的妥当性の検討を依頼した。その結果、一部修正が加えられ、筆頭著者を変えた 10 名の協議の結果、10 名全員により適切であると判断された。具体的な評価項目は、Table 3 の通りである。

本研究では、青年期ダウン症者の知的発達レベルを考慮して、自己効力感の測定及び回答に関して、生活年齢が低い健常幼児を対象とした先行研究(中澤, 1995¹⁵)を参考に、絵カードを用いてダウン症者が評価項目の内容を理解しやすいように工夫することにした。絵カードは、1 項目につき男女別々に準備され、被験者と同姓のものを使用した。絵カードには、男性(あるいは女性)が各項目に対応する課題の様子が描かれている (Fig. 1)。回答にも絵カードを用いた。回答用絵カードも男女別に用意され、5 種類の顔が描かれている。顔は、「ぜったいできる」、「たぶんでできる」、「どちらともいえない」、「たぶんでできない」、「ぜったいできない」を表す (Fig. 2)。

3. 手続き

自己制御機能の測定は、1999 年 7 月、9 月、2000 年 7 月から 9 月にかけて、被験者を担当する学校の教員に依頼した。

自己効力感の測定は、1999 年 7 月、9 月から 11 月、2000 年 7 月から 9 月にかけて実施した。測定は、中澤(1995¹⁵)を参考に、著者が被験者と 1 対 1 の個別面接により実施した。調査者は、絵カードを見せながら、「これから、ここにある絵を使って～さんはどこにあてはまるかということをお聞きします。私の話をよく聞いて、～さんのあてはまる顔を選んで下さい。この男の子を～さんだと思って下さい(練習用絵カードの矢印のついた男の子をさす)」という指示を与え

Table 2 知的障害者の自己に関する行動調査質問紙

質問項目
自己主張面
「能動性・主体性」 意見を聞いたり、感想を求めると、自分なりの考えや感想を出す。 他の友達と自分の意見が違っていると臆せず主張する。 他の友達に自分の考えやアイデアを話す。 社会見学等の買い物場面で自分の考えているものを買える。 自分の考えや意見を自分から述べる。 持久走大会などで苦しくなった時に自分でそのことを伝えられる。 数種類の学習活動を設定した場面で、自分の挑戦した場を選択できる。 体調の悪い時に訴えることができる。 将来の進路について自分の考えを意志表示できる。 学習の時に、教材の選択場面で自分の好きな教材を選択できる。 自分のやりたい係り活動や役割を意志表示できる。 自分が何かをしたい時に許可を求めることができる。 感想を求められた時に何らかの感情や気持ちを示せる。
「拒否・強い自己主張」 自分の順番に他の人が割り込んできた時、「いけない、私の番だ」と意志を示す。 友達に意地悪されると「やめてくれ」と意志を示す。 嫌なことははっきり嫌と意志を示す。 友達に惑わされずに自分のやりたいことを意志表示できる。 自分の期待したものと違うものが渡された時「違う」と意志表示する。 遊びたい玩具を友達が使っている時、「貸して」と意志を示す。 してほしいこと、ほしいものをはっきり大人に頼める。 他の友達の言いなりになる。 他人の助けが欲しい時お願いできる。 自分のやりたいこと、楽しく感じていることを意志表示できる。
「友人への積極性」 自分のやりたい遊びを友達を誘って始められる。 人から促されないと行動が起こせない。 遊びたい友達を自分から誘って遊べる。 入りたい遊びに自分から「入れて」という意志を示す。
自己抑制面
「待機行動」 「後であげます」と言えば待てる。 「してはいけない」と言われたことはしない。 「ちょっと待っていなさい」で待てる。 遊びの中で順番を待てる。 友達の物や他の人が使っている玩具がほしいとすぐにとる。 給食やおやつが配られるのを待てる。 検診の時などは指示に従う。
「他者との協調性」 指示されたことが苦手なことや難しいことでも遂行できる。 他の人のものが欲しくても我慢する。 仲間と意見がくい違った時には願望を抑える。 自分には不都合だったり損なことでも他の人のためにゆずれる。 仲間と意見が違う時、相手の意見を受け入れられる。 教師に話しかけた時、他の人が話している間待ってられる。
「感情抑制」 したいことをとめられるとやめる。 悲しいこと、くやしいこと、つらいことなどの感情をすぐに爆発させずに抑えられる。 集団の中で我慢できる。 要求が受け入れられなかった時にかんしゃくを起こす。
「規則への従順」 課せられた仕事を途中で放りださないで、最後までやり通す。 してはいけない時があることがわかり、やめる。 他の人と同じ物を欲しがらる。 休み時間と授業中の区別ができない。 遊びたくても係りの仕事などしなければならぬことができる。 給食やおやつの時、自分の好きなものを他の人の分も食べてしまう。 授業中に他のことに興味がうつり離席する。

Table 3 自己効力感の測定項目

<p>自己主張面</p> <p>「能動性・主体性」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中、みんなで本を読んでいた。先生が読み終わった後、「読んで思ったことや感じたことを手を挙げていって下さい。」とみんなに尋ねました。あなたは、手を挙げて答えることが（ ）。 ・みんなで何をして遊ぼうか話し合いをしています。あなたは、ボールで遊びたいと思っています。あなたは、「ボールで遊ぼう」といいたすことが（ ）。 ・みんなでお菓子を買いに、お買い物にスーパーに行きました。あなたは、飴が欲しいと思っていました。あなたは、みんなに向かって「飴が欲しい」といいたすことが（ ）。 ・みんなで演劇をやることになり、やりたい役を決めています。あなたは、自分からやりたい役をいうことが（ ）。 <p>「拒否・強い自己主張」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ある友達が、ゲームの途中であなたの順番をとろうとしています。あなたがその友達に、「今は僕（私）の番だよ」ということが（ ）。 ・みんなが手を洗うために水道に一列に並んでいるときに、ある友達があなたの前に割り込んできました。あなたが、その友達に割り込まないようにいうことは（ ）。 ・あなたは友達とどんなゲームをするか決めていますが、友達はあなたの大変嫌いなゲームをしたいと言っています。あなたが、「嫌だ」ということは（ ）。 ・あなたは鉛筆で絵を一生懸命かいていました。すると、突然友達が使っていた鉛筆を取ろうと意地悪をしはじめました。あなたは、友達にやめてということが（ ）。 <p>「友人への積極性」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが楽しそうにボールで遊んでいます。あなたは「仲間に入れて」ということが（ ）。 ・休み時間になりました。みんな教室を出ていこうとしています。あなたが、仲のいい友達に「一緒に遊ぼうよ」ということは（ ）。 ・休み時間で、あなたはみんなと運動場で遊んでいますが、あなたと一番仲のいい友達は教室にいます。一番なかのいい友達を「一緒に遊ぼうよ」と誘うことは（ ）。 ・休み時間になりました。あなたは鬼ごっこがしたいと思っています。あなたはみんなに向かって「鬼ごっこをしようよ」ということが（ ）。
<p>自己抑制面</p> <p>「待機行動」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おやつにあめを1個づつ先生が配っていましたが、あなたの分だけ足りませんでした。先生が「今からあなたの分を取りに行くから少し待ってて」と言いました。あなたは、待つことが（ ）。 ・給食の時間で、友達がお飯やおかずを順番に配っています。あなたは、自分の食べ物が配られるのをじっと待っていることが（ ）。 ・友達が順番に一列に並んで検診を受けています。あなたは、自分の順番がくるまで待つことが（ ）。 ・体育の時間で、ボール運動をすることになりました。先生がボールを配っていましたが、「まだボールで遊ばないで」と言っていました。あなたは、ボールで遊ばないで待っていることが（ ）。 <p>「他者との協調性」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何をして遊ぼうかと友達と話していました。あなたは、鬼ごっこをしたかったのですが、友達はみんな「ボールで遊びたい」と言いました。あなたは、自分のやりたい鬼ごっこを我慢してボール遊びをすることが（ ）。 ・音楽の時間に太鼓をみんなで叩くことになりました。あなたは大きな太鼓が苦手だったのですが、友達と先生から「大きな太鼓をやって欲しい」と頼まれました。あなたは、大きな太鼓をすることが（ ）。 ・休み時間にあなたはボール遊びをしようと思いついたボールを取りに行きました。ボールは1個しかなかったのですが、友達も「ボールを使いたい」と行ってきました。あなたは、ボールを友達に譲ることが（ ）。 ・絵を描く授業で、先生が色鉛筆を配っていました。あなたは、青色が欲しかったのですが、数が足りずもらえませんでした。隣の友達は、青色の色鉛筆を使っていました。あなたは友達が使っているのを我慢することが（ ）。 <p>「感情抑制」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休み時間に、あなたは友達と鬼ごっこをやる約束をしていました。でもその友達は、急に先生に呼ばれて鬼ごっこができなくなってしまいました。あなたは、友達に怒らないでいることが（ ）。 ・授業中、みんなと一緒に絵を描いていました。あなたは、まだ絵が全部かけてなく、途中でしたが、先生が「絵をかくのをやめなさい」と言いました。あなたは、絵をかくのを我慢してやめることが（ ）。 ・体育でみんなに先生が「何がしたい」と聞いてきました。あなたは、「ボール運動」と言いましたが、友達が「マラソン」といいました。そして、先生は「マラソン」をすと言いました。あなたは、怒らないでマラソンをすることが（ ）。 ・みんなで一緒にがんばって歩いて遠足に行くことになりました。あなたは歩くことが嫌でしたが、我慢してみんなと一緒に歩くことが（ ）。 <p>「規則への従順」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あなたは休み時間に友達と楽しくボールで遊んでいました。でも授業が始まる合図になりました。あなたは、ボール遊びをやめることが（ ）。 ・給食の時間にあなたの好きな食べ物ができました。あなたは、他の人のぶんを食べないでいることが（ ）。 ・授業中なので、自分の席に座っていなければなりません。あなたは、授業の間ずっと座っていることが（ ）。 ・あなたは、授業が終わったら黒板を消す係りでした。授業が終わり、あなたが黒板を消しているとみんな外に遊びに行っていますが、あなたは黒板を最後まで消すことが（ ）。

てから、調査を開始した。

はじめに、練習項目を用いて、「～さんの友達が積み木で遊んでいます。～さんも積み木で遊びたくなりました。～さんは友達に『積み木を貸して』と言えるでしょうか。」と質問した後、回答用絵カードを見せ、「～さんは、ぜったいできる、たぶんできる、どちらともいえない、たぶんできない、ぜったいできないのうちどれでしょう。」と顔の絵を指しながら尋ねた。被験者には、5種類の顔の中から1つを選択させるよう求めた。この練習後、28項目全てについて同様に実施された。

4. 得点化

自己制御機能の得点は、評定尺度に基づき1から5点の得点化を行った。「知的障害者の自己に関する行動調査質問紙」は逆転項目を含んで

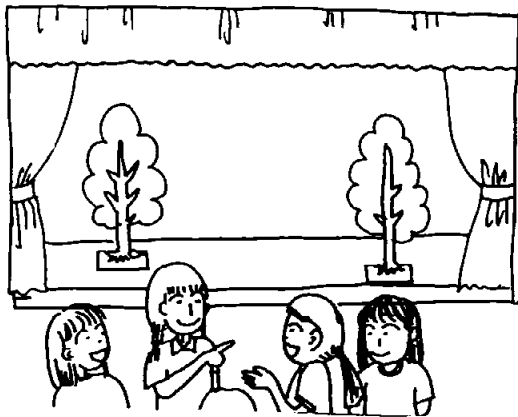


Fig. 1 自己効力感の評価項目に関する絵カード (女性用)
 ・内容は、演劇において役割を決めている場面で、自己主張面の「能動性・主体性」の評価項目において使用した。

いるため、これら質問項目は得点を逆転させた。

自己効力感の得点も、評定尺度に基づき1から5点の得点化を行った。

III. 結果

1. 自己効力感の測定の信頼性

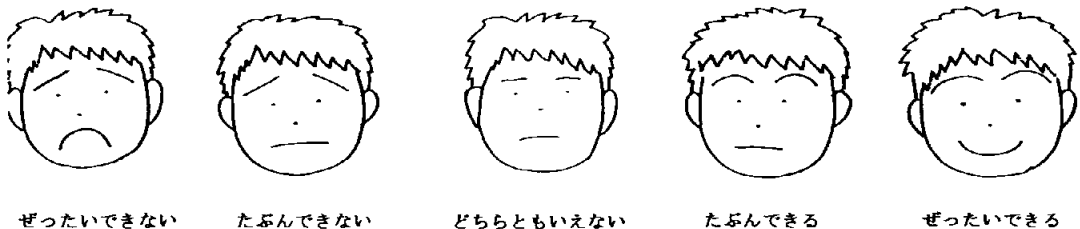
自己効力感の内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、.81であり、研究目的で使用する尺度として信頼性があることが示された。

2ヶ月後に対象となった被験者10名に対して再検査を行った。再検査の信頼性係数を求めた結果、 $r = .90$ であった。少人数のため、被験者10名の全質問項目について2回の一致率を算出したところ、87.6%が一致していた。

2. 自己効力感と自己制御機能の差

Fig. 3から、全体的にみると自己効力感の平均得点は自己制御機能の平均得点に比べて高い得点を示しているが、以下に有意差があるか否かを検定した結果を示す。自己効力感の全体の平均得点は、3.5点 (SD=0.77) であった。二領域の自己効力感の平均得点は自己主張面の自己効力感が3.4点 (SD=0.62) で自己抑制面の自己効力感が3.7点 (SD=0.59) であった。二領域の平均得点に対してt検定を行ったところ、有意でなかった ($t(23) = 2.00, p > .01$)。従って、自己主張面と自己抑制面の自己効力感において、有意差はないことが示唆された。

下位次元別の自己効力感の平均得点は、Fig. 3の通りである。自己主張面について3(下位次元)×2(自己制御機能・自己効力感)の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった (F



ぜったいできない たぶんできない どちらともいえない たぶんできる ぜったいできる

Fig. 2 自己効力感の回答において使用した絵カード (男性用)

青年期ダウン症者の自己制御機能と自己効力感の関係

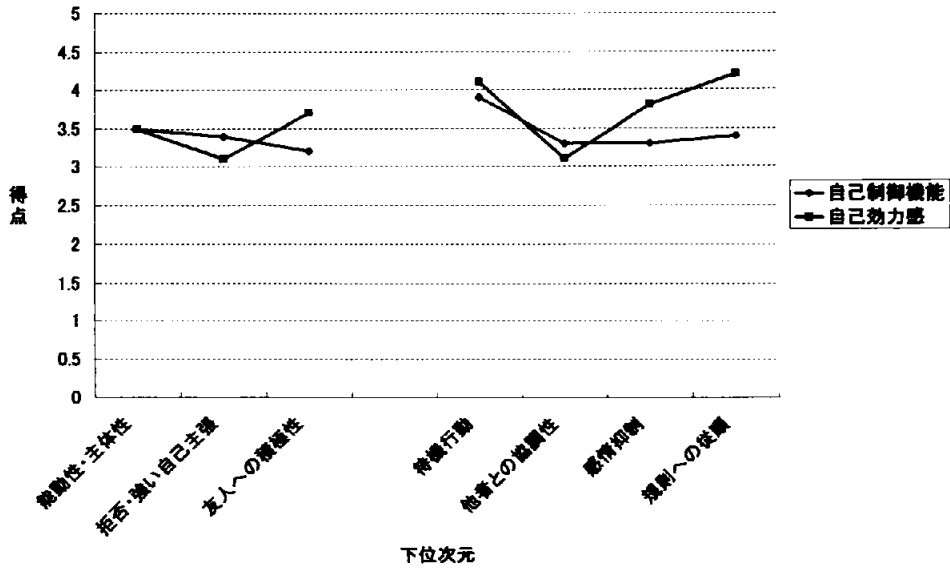


Fig. 3 自己制御機能と自己効力感の得点結果

(2,60)=7.05, $p < .01$)。下位次元の単純主効果を検討したところ、自己制御機能 ($F(2,60) = 3.24, p < .05$) と自己効力感において有意であった ($F(2,60) = 3.43, p < .05$)。「友人への積極性」では、自己効力感の方が自己制御機能より有意に高かった ($F(1,30) = 4.66, p < .01$)。LSD法による多重比較の結果、自己制御機能の「能動性・主体性」は「友人への積極性」より高く ($MSe = 0.29, p < .05$)、自己効力感の「友人への積極性」は「拒否・強い自己主張」より高い ($MSe = 0.77, p < .05$) ことが示された。

自己抑制面について4(下位次元)×2(自己制御機能・自己効力感)の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった ($F(3,90) = 14.74, p < .01$)。下位次元の主効果を検討したところ、自己制御機能 ($F(3,90) = 15.42, p < .01$) と自己効力感において有意であった ($F(2,90) = 30.24, p < .01$)。下位次元の「感情抑制」と「規則への従順」は、自己効力感の方が自己制御機能より有意に高かった ($F(1,30) = 7.00, p < .05$; $F(1,30) = 37.42, p < .01$)。LSD法による多重比較の結果、自己制御機能では待機行動が他の下位次元よりも高く ($MSe = 0.17,$

$p < .05$)、自己効力感では「待機行動」と「規則への従順」が「他者との協調性」及び「感情抑制」よりも高く、「感情抑制」は「他者との協調性」よりも高いことが示された ($MSe = 0.25, p < .05$)。

3. 自己制御機能と自己効力感の相関

自己制御機能の二領域である自己主張面と自己抑制面の平均得点と自己効力感の平均得点について、Pearsonの積率相関係数を求めた。その結果、自己主張面では自己制御機能と自己効力感の相関係数は0.66であり、有意であった ($F(1,29) = 22.93, p < .01$)。説明率は39.7%であり、中程度の相関があった。自己抑制面では、自己制御機能と自己効力感の相関係数は0.39であり、有意であった ($F(1,29) = 7.14, p < .05$)。説明率は16.8%であり、中程度の相関があった。

自己制御機能の自己主張面の3下位次元及び自己抑制面の4下位次元と自己効力感について、Pearsonの積率相関係数を求めた。その結果は、Table 4の通りである。自己主張面の下位次元のうち自己効力感と相関があったのは、「能動性・主体性」であり ($F(1,29) = 16.82, p < .01$)、説明率は60.8%で強い相関があった。

Table 4 自己主張面と自己抑制面の下位次元と自己効力感の関係

<自己主張面>	相関係数
能動性・主体性	0.78**
拒否・強い自己主張	0.56**
友人への積極性	0.35
<自己抑制面>	
待機行動	0.57*
他者との協調性	0.27
感情抑制	0.07
規則への従順	0.48**

**は $p < .01$ 、*は $p < .05$

「拒否・強い自己主張」も自己効力感と相関があり ($F(1,29) = 12.92, p < .05$)、説明率は31.4%で中程度の相関があった。一方、自己抑制面の下位次元のうち、自己効力感と相関があったのは「待機行動」であり ($F(1,29) = 10.8, p < .05$)、説明率は27.04%で中程度の相関があった。「規則への従順」も自己効力感と相関があり ($F(1,29) = 8.52, p < .01$)、説明率は23.04%で中程度の相関があった。その他の自己抑制面の下位次元は自己効力感と相関がなかった。

IV. 考察

自己制御機能と自己効力感の差を分散分析によって、下位次元ごとに検討を行った結果、自己主張面における「友人への積極性」において有意差が認められ、自己効力感の方が高いことが明らかとなった。「友人への積極性」の自己効力感は、「拒否・強い自己主張」より有意に高かった。これより、青年期ダウン症者は友人に積極的に関わることが、拒否や明確な自己主張よりも可能であると認知しており、教員の評定である自己制御機能よりも高い評価を行っていることが明らかとなった。青年期ダウン症者の学校への適応を調査した細川・池田・菅野・橋本(1992⁹)では、友達との関係において問題が認められたことや引きこもりが高い割合で認められたことが報告されている。従って、青年期ダウン症者は友人への積極性に関する自己効力感

は高いものの、実際の行動は消極的であり、問題を抱えている場合もあると推測される。

自己抑制面における「感情抑制」と「規則への従順」の自己効力感は、自己制御機能よりも高かった。従って、青年期ダウン症者は自己の感情を統制することや学校等の規則に従うことに関しては、実際の行動よりも可能であると認知する傾向にあることが示唆された。

自己制御機能と自己効力感の相関を検討した結果、自己制御機能の自己主張面及び自己抑制面ともに自己効力感と相関があった。このことは、自己主張面及び自己抑制面の自己効力感は実際の行動の予測値として機能する働きがあることを示唆するものである。自己効力感に関する臨床研究では、自己主張を促すような訓練において自己効力感が実際の行動と関連性があることが既に指摘 (Pentz & Kadzin, 1982¹⁰) されている。これらより、自己効力感は自己主張面の自己制御機能と関連性があり、臨床的にも自己効力感が重要な役割を果たしているといえよう。

下位次元別に検討した結果、自己主張面では「能動性・主体性」と自己効力感に強い関連性があり、「拒否・強い自己主張」にも中程度の相関が認められていた。「能動性・主体性」は、自己決定的要素や学習場面での自主性に関する要素を多く含んでいる。従って、自己決定や自主性が求められる学習場面では、青年期ダウン症者が自己効力感を高くもつことがその後の行動により良い影響を与える可能性が高いと推察される。健常児を対象とした学習場面に関する先行研究 (伊藤, 1996⁷) ; Schunk, 1982²⁰) ; 1983²¹) ; Zimmerman & Martinez-Pons, 1990²⁷) では、自己効力感の原因帰属や学習方略などと共に重要な変数となることが指摘されており、本研究結果もこのような先行研究と一致したと考えられる。

自己抑制面では、「待機行動」及び「規則への従順」と自己効力感に中程度の相関が認められていたが、「他者との協調性」、「感情抑制」と自己効力感との間には相関がなかった。相関がな

かった「感情抑制」や「他者との協調性」は、「待機行動」や「規則への従順」に比べて、自他の要求や自己の行為の結果など、多様な要因や結果を考慮した社会的行動が必要とされる下位次元である。このような、多様な要因や結果を考慮する必要のある社会的行動にまで自己効力理論を展開することは限界があることが指摘 (Maddux & Stanley, 1986¹⁴⁾) されており、本研究結果もこれら先行研究と一致したといえる。

以上より、自己主張面では「能動性・主体性」及び「拒否・強い自己主張」は自己制御機能と自己効力感の有意差は認められず、自己効力感が自己制御機能の予測値として機能する可能性が示唆された。中でも、強い相関が認められた「能動性・主体性」では自己効力感を高めることが自己制御機能も高める可能性があるとして推測される。一方、「友人への積極性」に関しては、自己効力感の方が自己制御機能よりも有意に高く、両者に関係はない可能性が示唆された。友人とかかわる場面では、ダウン症者は積極的にかかわることができるという高い自己効力感を抱いているものの、実際はダウン症者本人が抱いているよりも、積極的な関わりができていないと推測される。このような自己制御機能の特徴は、青年期ダウン症者の適応行動を検討した先行研究 (細川ら, 1992⁹⁾) で、引っ込みがちであると評価されることとも関連性があるかもしれない。

自己抑制面に関しては、「感情抑制」と「規則への従順」は自己効力感の方が自己制御機能よりも高いことが示唆された。これら下位次元のうち、「感情抑制」は自己制御機能とは相関が認められないことが示唆されたが、「規則への従順」は中程度の相関が認められていた。「感情抑制」に関わる要因としては、先行研究 (小島・池田, 2000 b¹¹⁾) では社会的視点取得能力や状況認知能力が示されている。自分の感情を抑制する必要のある場面では、ダウン症者自身が抱く自己効力感よりも他者の役割視点を含んだ認知能力が関連していると推察される。一方、規則に従わなくてはならない場面では、ダウン症

者は高い自己効力感を抱いているものの、自己制御機能とは相関があり、その後の行動を予測する機能として自己効力感が働く可能性があることが示唆された。この他の下位次元である「待機行動」と「他者との協調性」は、自己制御機能と自己効力感の差は認められなかったが、「待機行動」のみ両者に中程度の相関が認められていた。従って、順番などを待つ必要のある場面ではダウン症者の抱く自己効力感と自己制御機能とは得点差がなく、中程度の相関が認められることが示唆された。

IV. まとめと今後の課題

青年期ダウン症者を対象として自己制御機能と自己効力感の関係について検討した。その結果、自己主張面では「能動性・主体性」及び「拒否・強い自己主張」は自己制御機能と自己効力感の有意差はなく、自己効力感が自己制御機能の予測値として機能する可能性が示唆された。よって、自己決定や課題への自主的な取り組みが求められる場面では、青年期ダウン症者の自己効力感を高めるような指導が重要であると推察された。自己抑制面では、「待機行動」と「規則への従順」に中程度の相関が認められ、自己制御機能と自己効力感の有意差は「規則への従順」で認められたが、「待機行動」ではなかった。この他の下位次元である「他者との協調性」や「感情抑制」と自己効力感の相関はなく、多様な要因や結果を考慮する必要のある社会的行動にまで自己効力理論を展開するには限界があることが示唆された。

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。まず、本研究の結果はあくまでも自己制御機能と自己効力感の相関関係を示しただけであり、因果関係としては捉えていない。因果関係として明らかにしていくためには、今後さらに実験及び縦断的な実証的研究が必要になるといえる。次に、本研究で扱った自己制御機能の下位次元のうち「感情抑制」、「他者との協調性」は、自己効力感とは相関がなく、自己制御機能の規定要因を検討していくうえで、自己効力感

以外の要因を検討する必要があることが示された。従って、これら下位次元については、今後より詳細に自己制御機能の規定要因について分析する必要があると考えられる。さらに、自己効力感 は 自己制御機能を扱った臨床研究においても、非常に重要な変数となることが報告 (Pentz & Kadzin, 1982¹⁶⁾) されており、今後は青年期ダウン症者を対象として臨床的な研究へと応用していくことが課題といえよう。

文献

- 1) Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 2) Bandura, A. (1986) Social foundations of thought and action: A social cognitive theory. New York: Prentice-Hall.
- 3) Bandura, A. (1991) Social cognitive theory of self-regulation. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50, 248-287.
- 4) Cuskelly, M. & Gunn, P. (1997) Behavior Concerns. Pueschel, S.M. and Maria, S. (Eds), *Adolescents with Down Syndrome*. Baltimore: Paul H. Brookes Publishing.
- 5) Gibbs, M. V. & Thrope, J. G. (1983) Personality stereotype of noninstitutionalized Down syndrome children. *American Journal of Mental Deficiency*, 87, 601-605.
- 6) 細川かおり・池田由紀江・橋本創一・菅野 敦 (1992) 学齢期及び青年期ダウン症児・者の適応行動の特徴. *心身障害学*研究, 16, 111-116.
- 7) 伊藤崇達 (1996) 学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係. *教育心理学*研究, 44, 340-349.
- 8) Jobling, A. & Cuskelly, M. (2000) Health behaviors of adolescents with Down syndrome in response to designed scenarios. *Journal of Intellectual Disability Research*, 44(3 & 4), 336-337.
- 9) 柏木恵子 (1988) 幼児期における「自己」の発達 行動の自己制御機能を中心に. 東京大学出版会.
- 10) 小島道生・池田由紀江 (2000a) ダウン症者の自己制御機能に関する研究. *特殊教育学*研究, 37 (4), 37-48.
- 11) 小島道生・池田由紀江 (2000b) 青年期ダウン症者の自己制御機能に関わる要因の検討. *心身障害学*研究, 24, 9-19.
- 12) 小島道生・池田由紀江 (2000c) 青年期ダウン症者の自己制御機能と性格特性の関連性. *日本教育心理学会第42回総会発表論文集*, 626.
- 13) Loveland, K. A. & Kelly, M. (1988) Development of adaptive behavior in adolescents and young adults with autism and Down syndrome. *American Journal on Mental Retardation*, 93(1), 84-92.
- 14) Maddux, J. E. & Stanley, M. A. (1986) Self-efficacy theory in contemporary psychology: An overview. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 4, 249-231.
- 15) 中澤 潤 (1995) 社会的自己効力感の発達. *千葉大学教育学部研究紀要 教育科学編*, 43, 157-164.
- 16) Pentz, M. A. & Kadzin, A. E. (1982) Assertion modeling and stimuli effects on assertive behavior and self-efficacy in adolescents. *Behavior Research and Therapy*, 20, 365-371.
- 17) Powers, L. E. & Sikora, D. M. (1997) Promoting adolescent self-competence. In S.M. Pueschel & S. Maria, (Eds.), *Adolescents with Down syndrome*. Paul H. Brookes, Baltimore.
- 18) Pueschel, S. M. (1996) Young people with Down syndrome: Transition from childhood to adulthood. *Mental Retardation and Developmental Disabilities Research Reviews*, 2(2), 90-95.
- 19) 坂野雄二・東條光彦 (1993) セルフ・エフィカシー尺度. 上里一郎 (監修) *心理アセスメントハンドブック*. 西村書店, 478-489.
- 20) Schunk, D. H. (1982) Effects of effort attributional feedback on children's perceived self-efficacy and achievement. *Journal of Educational Psychology*, 74, 548-556.
- 21) Schunk, D. H. (1983) Ability versus effort attributional feedback: Differential effects on self-efficacy and achievement. *Journal of Educational Psychology*, 75, 848-856.

- 22) 竹綱誠一郎・鎌腹雅彦・沢崎俊之 (1988) 自己効力に関する研究の動向と問題. 教育心理学研究, 36(2), 172-184.
- 23) Thorensen, C. & Mahoney, M. J. (1974) Behavioral self-control. New-York: Holt, Rinehart & Winston.
- 24) Wheeler, V. A. & Ladd, G. W. (1982) Assessment of children's self-efficacy for social interactions with Peers. Developmental Psychology, 18, 793-805.
- 25) 山崎 晃・白石敏行 (1993) 幼児の自己実現を自己主張と自己抑制からとらえる. 保育学研究, 31, 104-112.
- 26) 横田圭司 (1996) 発達障害白書. ダウン症候群における「退行」. 精神薄弱連盟編.
- 27) Zimmerman, B. J. & Martinez-Pons, M. (1990) Student differences in self-regulated learning: Relating grade, sex, and giftedness to self-efficacy and strategy use. Journal of Educational Psychology, 82, 51-59.

Relation between Self-Regulation and Self-Efficacy in Adolescents with Down syndrome

Michio KOJIMA and Yukie IKEDA

The purpose of this study was to examine the relation between self-regulation and self-efficacy in adolescents with Down syndrome. Subjects were 31 adolescents with Down syndrome mental aged from 4.5 to 10.5. The questionnaire of self-regulation was conducted by their classroom teachers ; and the assessment of adolescents's efficacy was individually performed by first author. As the result, self-efficacy has a strong correlation with subjectivity/activeness in self-regulation, which is one of the factors of self-assertion. There were no significant differences between self-regulation and self-efficacy in subjectivity/activeness. It also has a low correlation with rejection strong self-assertion. This suggests that it is important for adolescents with Down syndrome to be guided to develop their self-efficacy, when they are solving problems or making decisions by themselves. Moreover, there was a certain correlation between self-efficacy and these two subfactors of self-regulation : await-action and obedience to regulation. On the other hand, no correlaiton was found between self-efficacy and cooperation with others or emotionality. This indicates the limitation of this self-efficacy theory to explain the social behavior, which need considering the demands or intentions of themselves as well as others.

Key Words : adolescents with Down syndrome, self-regulaiton, self-efficacy